

信念と共感に基づく未来志向の理念について

——ヘンリー・ソローの『森の生活』を手がかりとして——

菟川信弘*

Future-Oriented Idea based on Faith and Mutuality
An Experimental Essay getting on Henry D. Thoreau's
“Walden; or, Life in the Woods”

HARAIKAWA Nobuhiro

はじめに——問題提起

社会科学などの諸領域を幅広く学ぶことによって時代の変化に対応する能力を身につけ、自らの人生を豊かで実りあるものにするだけでなく、より多くの人々が真の豊かさを実感できる社会の構築に取り組む。そのような未来志向の人材を育成することこそが本学部の教育目標であると考えられる¹⁾。それでは、本学部に学ぶ学生たちが修得すべき未来社会を生きるために求められる理念とはいったい何だろうか。本稿では、ソロー²⁾の『森の生活 (Walden; or Life in the Woods)』に基づきながら、かかる理念について考察する。

社会問題の解決には問題の客観的認識だけでなくある種の感情の共有が

* 東北文化学園大学総合政策学部教授

1) 本学部の教育目標では、「社会科学、人文科学及びその他の関連する分野を総合的に学び、(中略)豊かな教養と人間性をもった人材を育成する」と謳われている(東北文化学園大学[2014], p.2)。

2) ソロー (Henry David Thoreau) は1817年米国東部に生まれ、機械生産による工場制度が急速に発展し、鉄道や改良農具が根底から社会を変えた米国資本主義の草創期を生きた。19世紀の米国社会では自給システムが市場経済に急激に移行していく。その渦中^{プロトタイプ}にあつて、彼は自然と調和しうるライフスタイルを実践し、持続可能な社会の原型を示している。

必要である。それは、同じ客観的事実であっても信念や感性の違いによって理解の仕方が異なるために生じる厄介な問題である。つまり、知識や情報の単なる集合としての教養の豊富化を図るだけではそれぞれに異なる信念や感性の違いを越えた行動をもたらすことは困難であるといえる。また、その点に、本学部の教育目標において「人間性」が求められる理由がある。その点に着目しながら、ソーローが『森の生活』で2年余りに及んだ実験的生活（あるいは農的自給生活）について述べている以下の文章を見てみよう。

人間の魂のたいせつさや、今日という日のたいせつさを考えてみると、この実験に費やした期間は短かったにもかかわらず、いや、むしろそれが一時的な性格のものだったからこそ、私はその年のコンコードのどんな農民よりもよい成績をあげることができたのだと考えている。（ソーロー・飯田[1995a], p.101〔傍点は引用者〕）

“All things considered, that is, considering the importance of a man's soul and of to-day, notwithstanding the short time occupied by my experiment, nay, partly even because of its transient character, I believe that that was doing better than any farmer in Concord did that year.” (Thoreau [1854] p.36〔下線は引用者〕)

ソーローによる『森の生活』の草稿執筆当時(1845～54年)、彼が暮らしていたニュー・イングランド地方の田舎町コンコードの人口構成における農業者の割合は低くはなかったと考えられるが、フランス人の血をひき文具商から鉛筆製造業に身を転じた父親の下で育ったソーロー自身は農業を生業とする家庭に育ったわけではない。もちろん、幼少時代から作物の栽培に興味を抱き、兄との川旅に出かける前に開いたパーティーで自らが作ったメロンの味が評判になった(ハーディング・山口[2005] pp.126-127)ソーローは友人のエマソンを驚かせるほどの手仕事の才能を発揮していたのであるから、家庭菜園程度の作物栽培技術に関する習熟度が高かったとしても不思議はない。とはいえ、いわゆる文科系の大学を卒業した後、教師、私塾的初等教育校の共同経営、鉛筆製造、日雇労働などの職務経験しかなかった非農家出身の若者が突然2.5エーカー(約1ヘクタール)もの畑を耕作し、収穫物を売って現金を手にしえ

たことは、時代の相違を考慮しても驚くべきことである。素人ではありながら、当時の農業事情に精通していたはずのソローが「どんな農民よりもよい成績をあげることができた」と敢えて公言した背景には、当時の農業をとりまく状況とそのあり方に対する彼なりの強い思い入れがあったのではないかと考えられる。

1 なぜ2.5エーカーの畑が必要だったのか？

なぜソローには2.5エーカーの広さの土地が必要だったのだろうか。『森の生活』の中で彼はその理由を臨時の支出に備えて、なにか正直な気持ちのいい方法で10ドルか12ドルかせいでおきたかった（ソロー・飯田[1995a] p.99）と述べるにとどめている。その箇所を素直に読めば、主作物であるインゲンマメの期待収量と販売価格を前提に、目標収益を達成するためにはその栽培面積（2.5エーカー）が必要であると彼が考えていたことになる（“Before I finished my house, wishing to earn ten or twelve dollars by some honest and agreeable method, in order to meet my unusual expenses” [Thoreau [1854] p.35]）。

しかし、ソロー自身が次の年には必要なだけの土地—約3分の1エーカー（ソロー・飯田[1995a] p.101）にまで耕作面積を縮小しているうえに、質素な食生活で自給的生活をするだけなら2, 3ロッド³⁾（約50～75m²）で足りる（if one would live simply and eat only the crop which he raised, …… he would need to cultivate only a few rods of ground [Thoreau [1854] p.36]）と述べている点を勘案すると、現金収入を得るために農作物を栽培する必然性はなく、むしろ彼が習熟していた日雇仕事で現金を稼ぎ、自分が食べるために必要な分だけの食材のみを栽培するという選択の方が理に適っていたと考えられる。また、独立性が高く年に三、四十日も働けば暮らせる（ソロー・飯田[1995a] p.126）（“the occupation of a day-laborer was the most independent of any, especially as it required only thirty or forty days in a year to support” [Thoreau [1854] p.46]）とされている日雇仕事が彼にとって「正直な気持ちのいい方法」でなかった

3) 1ロッド (sq rod)は160分の1エーカーである。

とは考えがたい。さらに、自給に要する労力は「信じがたいほどわずか」(ソロー・飯田[1995a] p.112) (“incredibly little” [Thoreau [1854] p.40])であり、市場依存からの脱却の決め手が購買欲求の制御技術(“my greatest skill has been to want but little” [Thoreau [1854] p.45])にあるという結論を導くことが目的であるとした場合、2.5エーカーという面積は明らかに大きすぎると考えられる。

2 問題よりも複雑な公式

ソローが暮らしていた当時のニュー・イングランド地方はライムギとトウモロコシの産地であり、主食のパンの素材となる自家消費分の「ライムギやトウモロコシなら簡単につくれる」(ソロー・飯田[1995a] p.116) (“Every New Englander might easily raise all his own breadstuffs in this land of rye and Indian corn, and not depend on distant and fluctuating markets for them.” [Thoreau [1854] p.41])のであるから、遠隔地の市場の変動に振り回されることはないはずであるにもかかわらず、多くの農民は自分で作った穀物を家畜に食わせ、自分の食べる穀物を「高い値段で店から買っている」(ソロー・飯田[1995a], p.116) (“the most part the farmer gives to his cattle and hogs the grain of his own producing, and buys flour . . . at a greater cost, at the store.” [Thoreau [1854], p.41]). 「生計の問題を、問題自体よりもずっと複雑な公式を使って解こうとしている」(ソロー・飯田[1995a] p.63〔傍点は引用者〕)というソローの言及はまさしくそのような農民たちの行動を指したものであると考えられる (“The farmer is endeavoring to solve the problem of a livelihood by a formula more complicated than the problem itself.” [Thoreau [1854] p.21]).

では、大工、左官、庭師などの手仕事を巧みにこなす能力を持ち、「自らの手」を用いた労働(“the labor of my hands” [Thoreau [1854] p.1])によって現金収入を得る仕事にはこと欠かなかつたはずのソロー⁴⁾が、なぜ臨時的支出に備

4) 「私は指のかずほども職業をもっているのです、そのあいだにも、土地測量、大工仕事、そのほか村のいろいろな日雇い仕事をやって、十三ドル三十四セントかせいだ」(ソロー・飯田[1995a] p.107) (“By surveying, carpentry, and day-labor of various other kinds in the village in the mean while, for I have as many trades as fingers, I had earned \$13 34.” [Thoreau [1854] p.38]).

えて10ドルか12ドル稼ぐという問題を解決するために、荒地を開墾して畑をつくり、種子を購入して真夏の炎天下での除草作業を含む数ヶ月間の栽培管理労働に取り組み、生産物を売る苦勞まで経験しながら⁵⁾、自らが揶揄している「複雑な公式」を取って用いようとしたのだろうか。

既述のように、ソローは「どんな農民よりもよい成績をあげることができた」(ソロー・飯田[1995a] p.101〔傍点は引用者])と自画自賛している。しかし、「湖」(“The Pond”)の章では「プリント」という農場主を特定して農作物の収益のみを追求することを厳しく批判(または糾弾)している(ソロー・飯田[1995b] pp.45-48)のであるから、「よい成績」(“doing better”)が単なる収益を意味するものでないことは自明であろう。

文脈から読みとる限り、ソローが「よい成績」をあげることができたとしている根拠は、家や農場(の債務)に縛りつけられずに自分の天分(my genius)の欲するままに思い通りに生きることができた(ソロー・飯田[1995a] p.102)点に求められると考えられる。“I was more independent than any farmer in Concord, for I was not anchored to a house or farm, but could follow the bent of my genius, which is a very crooked one, every moment.” [Thoreau [1854] p.36]。すなわち、「よい成績」という自己評価はいわば彼自身の信念の表明である。仮に、ここで「支払意志額」(willingness to pay)(栗山浩一[2005] pp.25-27)を想定するならば、マメ畑での作業(doing)から得られる彼の便益評価額はコンコードのどの農民よりも高いということになるであろう。換言すれば、その「高い」評価によって示される「固い」信念こそが1人の手作業には広すぎる2.5エーカーの畑での(他者にとっては価値の低い)除草(hoe)に彼を駆り立て、支えたものであると考えられる。

別の箇所では、ソローは「私がおもに語りかけたいのは、日ごろ不満をいだし、いたずらに自分の不運や時世のひどさを嘆いているだけで、いっこうに事態を改善しようとはしない大多数のひとびとに対してである」(ソロー・飯田[1995a] p.32)と述べている([I do speak] “mainly to the mass of men who are discontented, and idly complaining of the hardness of their lot or of the times, when they might improve them.” [Thoreau [1854] p.10])。

5) ソローは「ひとに売ったり(これがいちばんむつかしかった)」(ソロー・飯田[1995a] p.287) (…… and selling them,—the last was the hardest of all [Thoreau [1854] p.104])と述べている。

ソロー自身は客観的な観察と知識に基づいて、農民たちが懸命に働きながら貧しさから逃れられない根本的な原因が市場への過度の依存にあるという結論に達していた。しかし、彼は同時にそれを農民に論理的に納得させるという行為が孕む矛盾と認識したのではないだろうか。農民たちはソローとは異なる信念の下で土地に根ざして自然と共に生き⁶⁾、その多くは尊敬すべき存在である⁷⁾。農民とソローが相互の信念の違いを越えた理念を共有するためには、心理的障壁を越えた共感が必要であると彼は直観的に認識したと考えられる。農民の信念に基づく思考および行動様式は以下のように描写されている。

ある農夫が私に言う。「人間はね、野菜みたいな植物性のものばかり食べていたんじゃ、生きてはいけないよ。骨をつくる成分がとれないんだから」。そこで農夫は、自分のからだに骨の原料を供給するための仕事に、一日の一定時間をうやうやしく捧げる。こうしておしゃべりするあいだも、畑を耕すウシのあとからついて歩くのだ。ところが植物製の骨を持つウシのほうは、あらゆる障害物をものともせず、この男と重たい犁^{すき}をぐんぐんひっぱってゆく。(ソロー・飯田 [1995a] pp.20-21 [ふりがなは翻訳者])。

“One farmer says to me, “You cannot live on vegetable food solely, for it furnishes nothing to make bones with;” and so he religiously devotes a part of his day to supplying his system with the raw material of bones; walking all the while he talks behind his oxen, which, with vegetable-made bones, jerk him and his lumbering plough along in spite of every obstacle.” (Thoreau [1854] p.5)

一見、農夫を揶揄しているかのように読めるこの箇所は、同時に、経験と

6) この点に関連して、「核心とは信念にほかならない」(ソロー・飯田 [1995a] p.118) (“the root is faith” [Thoreau [1854] p.42])とソローは述べている。

7) 「湖」(“The Pond”)の章において「農夫は貧しければ貧しいほど(中略)私にとっては尊敬すべきもの、興味深いものに思える」(ソロー・飯田 [1995 b] p.48) (“Farmers are respectable and interesting to me in proportion as they are poor” [Thoreau [1854] p.128])とソローは述べている。

現実的感性に基づく強固な信念をソローが理解し、彼なりの（個性的な）敬意を表していると理解することも可能であろう⁸⁾。確かに、農夫の言動は摂食と身体の形成に関する誤解によるものであるに違いない。ソローは植物しか食べないウシに牽引される農夫の姿を描写することでその矛盾を指摘しているのだが、それを観察し描写するソロー自身もまた農夫に畑を耕してもらわなければ耕作できない（単独では）無力な存在である。『森の生活』（“Walden”）の「経済」（“Economy”）の章に収められたこの文章は言外にその関係性を示すものである。その両者の関係性は、「なぜ2.5エーカーの面積が必要だったのか？」という疑問に対して暗示されたヒントの一つと考えられるのである。

伝統的慣習や時代の制約を受けた教育によって形成された強固な信念を持ち、その信念のために日々の労働に耐えることのできる能力を身に付けながら市場への過度の依存から逃れられない農民たち。そして大学教育やヘッジ・クラブなどでの知的交流によって習得しえた知識人としての視点から現実を直視し、現実的諸問題の本質について認識しながら、農民たちにそれを納得させることのできないソロー。その両者の関係を改善し、修復するために選択された方法の一つが自力で家を建て自給的生活を送ることであり、もう一つの方法が2.5エーカーの「マメ畑」（“Bean-field”）を開墾し、無謀さを承知のうえで手作業による耕作に取り組むことだったのではないだろうか。

すなわち、彼は自らの理念を農民に理解してもらうにはコンコードライシニアム文化協会での講演や「ダイヤル」誌上での言語表現を中心とした活動だけでは不十分であり、現実「生活」を実物大のモデルで展示し、実際の行動（除草）と結果（収量・収益）を示すことによって、直接的に彼らの感性に訴えることが必要であると考えたのではないだろうか。だからこそ、自らの生活を農民の直面する日常に重ね合わせようと2.5エーカーの畑でインゲンマメの栽培に取り組み、その結果として得られた達成感について、「どんな農民よりも

8) 別の箇所では、ソローにしては珍しく牛追いの農夫の言葉を肯定的に受容している。それが同じ農夫であるか否かは不明だが、経験に基づく知恵に対するソローの敬意を示す例証と考えられる。「あるウシ追いの男が予言したとおり、この切り株は割っているときと火にくべたときと、二度にわたって私をあたためてくれたわけだ」（ソロー・飯田 [1995b] p.144）（“As my driver prophesied when I was ploughing, they warmed me twice, once while I was splitting them, and again when they were on the fire, so that no fuel could give out more heat.” [Thoreau [1854] p.162]）

よい成績をあげることができた」(ソロー・飯田[1995a] p.101)と書かずにはいられなかったのではないだろうか。その意味において、「どんな農民より」(ソロー・飯田[1995a] p.101) (“than any farmer” [Thoreau [1854] p.36])はその臨場感を再現し、昂揚感を伝えるものであると考えられる。とはいえ、それが持続的なものでないことは誰よりもソロー自身が痛感していたはずであり、「一時的な性格」(ソロー・飯田[1995a] p.101) (“its transit character” [Thoreau [1854] p.36])という表現はそれを率直に示したものであると考えられる。無論、時代を先取りしたその実験が同時代の人々に直ちに理解されたとは考えがたい。しかし、それは彼の理念の正当な理解を妨げるものではないだろう。

3 農業による自然破壊

農業生産は大気、水循環、土壌などの自然環境や天敵、土壌微生物などの自然生態系による直接的な影響を受ける。また、農産物の消費も人間の身体的容量によって制限される。したがって、その成長には限界がある。そのような性質を持つ農業経営の難しさは当時の米国も現在の日本も変わりはない。だからこそというべきであろうか、自らも家業である鉛筆製造に深くかかわっていたソローは、収益追求のために手段を選ばない農場主に対して容赦のない厳しい批判の目を向けている。すなわち、「けがらわしい愚かな百姓」(ソロー・飯田[1995b] p.45) (“the unclean and stupid farmer” [Thoreau [1854] p.127])とヘイト・スピーチまがいの蔑称を用い、「ピカピカ光る1ドル銀貨や1セント銅貨表を眺める」^{おもて}のが好きで、「野ガモさえ侵入者とみなし」、「つかんだら離さない長いあいだの習慣から、指そのもの鉤型^{かぎ}の角^つみたいな爪に変わってしまった」(ソロー・飯田[1995b] p.45[ふりがなは翻訳者])と揶揄している(“Some skin-flint, who loved better the reflecting surface of a dollar, or a bright cent, in which he could see his own brazen face; who regarded even the wild ducks which settled in it as trespassers; his fingers grown into crooked and horny talons from the long habit of grasping harpy-like” [Thoreau [1854] p.127]).

その農場主「フリント」に対するソローの批判は、「湖の金銭的価値しか考えず、(中略)周辺の土地を枯渇させ、湖の水まで枯渇させようとした男(中略)干あがらせて湖底の泥の値段でそっくり湖を売りとばしかねなかった男」と

執拗に続く(ソロー・飯田[1995b]p.46) (“who thought only of its money value; … who exhausted the land around it, and would fain have exhausted the waters within it; … and would have drained and sold it for the mud at its bottom.” [Thoreau [1854] p.128]).

全土において広大な面積に上る湿地の農地転換が野生生物の生息域を奪い、無謀な農地利用が深刻な土壌流出問題を招くことになるその後の米国の歴史はソローの先見性を実証するものであるといえるだろう。また、事物の価値が市場での交換の成立によって初めて現実のものになるとする倒錯的価値観(物神性)が資本主義社会に内在する本質的問題であるという認識をソローは同時代人のマルクスと共有し、その点に関して「この男の農場では、なにひとつただのものは育たない。畑に穀物は実らず、野に花は咲かず、木に実は結ばず、育っているのはドルばかり、というわけだ」(ソロー・飯田[1995b] p.46) (“whose farm nothing is grows free, whose fields bear no crops, whose meadows no flowers, whose trees no fruits, but dollars” [Thoreau [1854], p.128]), あるいは、「彼は自分で育てた果実の美しさなどちっとも愛さないし、ドルに換えられるまでは果実が熟したことにはならない」(ソロー・飯田[1995b] pp.46-47) (“who loves not the beauty of his fruits, whose fruits are not ripe for him till they are turned to dollars.” [Thoreau [1854] p.128])といった表現で示している。

フリンツ農場を典型とする近代農業への批判と、家族を扶養するためにそれらの農場で懸命に働き、過酷な肉体労働によって生じる「体力の消耗を補うために必死で食べなくてはならない」(ソロー・飯田[1995b] p.66)アイルランド人農夫のジョン・フィールドへの同情とは、「マメ畑(The Bean-Field)」の章におけるソロー自身による(私たちは)「なぜ種子用のマメのことばかり気に病んで、人間の新しい世代を生み出すことは気にもかけないのだろう」(ソロー・飯田[1995a] p.292)という煩悶に通底する⁹⁾ (“Why concern ourselves so much about our beans for seed, and not be concerned at all about a new

9) 内田は、未来に起こるであろう出来事に対して一人一人が責任を負うことを「参加」と定義している(内田[1971] p.46)。また、小熊は、行動様式が伝統や慣習で決まる社会が変化して選択可能性が増大することによって「再帰性」(“reflexivity”)が増大した社会に適應するためには対話によって互いが変化し、新しい「われわれ」という関係性を作るしかないとしている(小熊[2012] pp.336-398)。

generation of men?" [Thoreau [1854], p.107])

われわれの目的は、大きな農場と大量の収穫物を手に入れることなので、われわれは不遜なまでにいそいで、不注意に農業を営んでいる。(ソロー・飯田 [1995] p.294 [傍点は引用者])

"it is pursued with irreverent haste and heedlessness by us, our object being to have large farms and crops merely." (Thoreau [1854] p.107 [下線は引用者])

ここで、主語が「われわれ」("us") および「われわれの目的」("our object") とされている点に着目してほしい。すなわち、直接的に農業を営むのは農民または農場主であるが、彼らの生産の目的は自給(自家消費)ではなく市場への販売である。したがって、生産物の最終消費者である「われわれ」は、自然に感謝しながら時間をかけて作物や家畜を育て上げるべき農業が自然への感謝を忘れて「不遜なまでに」(傍点は引用者)急がされ、多様な個性を持つ生物を育てる際に必要な配慮をせずに「不注意に」(傍点は引用者)営まれている("it is pursued with irreverent haste and heedlessness" [下線は引用者]) ことに対して共通の責任を持つ、という点がソローの言わんとするところであろう。また、「大きな農場と大量の収穫物」("large farms and crops") が求められる背景には生産および流通コストの低下によって安価な食料を確保し、労働力の再生産に必要なコストを引き下げるといふ資本主義的生産に共通する基本論理の貫徹が推察される。

貪欲さと利己心のため、また、大地を財産もしくは財産を手に入れるための手段としかみなさないわれわれに共通の卑しい習慣のため、風景はゆがめられ、農業はわれわれのもとで墮落し、農民はこのうえもなく卑しい¹⁰⁾ 生活を送っている。(ソロー・飯田 [1995a] p.295 [傍点は引用者])

"By avarice and selfishness, and a grovelling¹¹⁾ habit, from which none of us is free, of regarding the soil as property, or the means of acquiring property chiefly, the landscape is deformed, husbandry is degraded with us, and the farmer leads the meanest of lives." (Thoreau

[1854] p.108〔下線は引用者〕).

この箇所でも同様に、農業を墮落させている(“is degraded”)のは「彼ら」(“them”)ではなく「われわれ」(“us”)であり、われわれの(市場における消費行動を含む)「共通の卑しい習慣」(“a grovelling habit”)が農業を墮落させ、風景を歪めている(“the landscape is deformed”)というのが農業問題に関するソローの理解のしかたであると考えられる。

4 自然との関係

「農民は『自然』を盗賊の立場から知っているにすぎない」(ソロー・飯田 [1995a] p.295) (“He knows Nature but as a robber.” [Thoreau [1854] p.108]) とされた農民の多くが債務返済に苦しむ同情すべき存在であったはずであるが¹²⁾、短期的収益を追求するために、「人間の心臓と脳をこやしに」(ソロー・飯田 [1995b] p.48) 「高度」な農場を経営し、湖水景観を破壊した農場主に対してソローは怒りを顕わにしている。それは、「かつては聖なる技術であった」(ソロー・飯田 [1995a] p.294) 農業 (“husbandry was once a sacred art” [Thoreau [1854] p.107]) の冒流行為に対する義憤であり、そのような自虐的な経済活動に対する怒りから生み出される未来志向の健全な農業のあり方が「自給的」生活モデルだったと考えられる。

かかる文脈において、人間の経済を自然に依存する「小経済」と捉え、それを包摂する「大経済」との関係重視するベリーの視点(ベリー・加藤 [2008] pp.171-202) はソローを継承するものであると考えられる¹³⁾。両者においては、仮に農民が「盗賊」 (“robber”) であるとしても、その盗賊に強奪を命じている

10) 日本ソロー学会2014年度全国大会での示唆に基づき、上記で述べた文脈における “meanest” の訳語について補足したい。“mean”には「卑しい」の他に、「平均」または「中庸」の意味がある。“mean” 「卑しい」などの訳語が当てられることが通例だが、ここでの “meanest” を「平均」の意味で解釈できないだろうか。すなわち、自然とふれあいながら生計を立てている「農民」 (“the farmer”) は、自然とそれを歪めている「われわれ」との間において「最も平均(中間)的な暮らし (“the meanest lives”) を送っている」存在と考えることはできないだろうか。

11) “grovelling” の綴りは原文に従った。

12) ソローはこの点について、「それぞれの農場を名実ともに自分のものにしようとして、二十年、三十年、四十年と汗水流して働いている」(ソロー・飯田 [1995a] p.61) と説明している。

のは「市場」であり、それを左右しているのは他ならぬ「われわれ」自身の欲望であるとする共通性が存在する。それが資本主義的商品市場という怪物の活動を制御する法制度が未整備であり、経済活動に関する社会規範も未確立であった状況の下で、農民も含まれる伝統的生産者たちがその猛威にふりまわされていた19世紀中葉の米国社会を生きたソローが直視した現実だったのであろう。

ソローは「読書」(“Reading”)の章では、「書き記された言葉」(ソロー・飯田[1995a] p.184) (“A written word” [Thoreau [1854] p.67])を「身近にありながら、同時に普遍的なもの」(“It is something at once more intimate with us and more universal than any other work of art.” [Thoreau [1854] p.67])であり、「人生そのものにもっとも近い芸術作品」(“It is the work of art nearest to life itself.” [Thoreau [1854] p.67])であるとしながらも、次の「音」(“Sounds”)の章においては、「書物のみに没頭し(中略)書き言葉ばかり読んでいる」(ソロー・飯田[1995a] p.201) (“we are confined to books …… and read only particular written languages” [Thoreau [1854] p.72])と「隠喩なしに語る唯一の豊かな標準語である森羅万象の言葉を忘れてしまう恐れがある」としている(ソロー・飯田[1995a] p.201) (“we are in danger of forgetting the language which all things and events speak without metaphor, which alone is copious and standard.” [Thoreau [1854] p.72])。その意味において、読書家のソローが読書をする余裕のない農的生活(とりわけ初年度)は、彼が自然をより身近に感じ、彼の感性を回復するうえで効果的であり、『森の生活』全体を貫くソローの視点の形成(覚醒または再生)につながったと考えられる。人間の経済は自然界の存在なしには維持しえないにもかかわらず、文明の進展が人間をその産物の中でしか生きられず、かかる時空間を絶対視せざるをえない存在に変えていく(ソロー・飯田[1995a] pp.209-220)。その過程はソローによって、人間の頭脳が創造する仮想世界が真の「实在」(“reality”) (自然界に包摂され、関連づけられた時空間)から乖離し、それのみで自立しているように見える世界として、すなわち、「实在が架空のもの」とされる一方で、虚偽と妄想が確固たる真理

13) ニューヨークから帰郷したベリーが暮らしたケンタッキー州ポートロイヤルは企業も医療機関も学校もなくなり、「死にかかっている」(ベリー・加藤[2008] p.117)町となることで、皮肉にもベリーに地域経済やコミュニティの重要性をより一層切実に認識させることになる。

としてもてはやされている」(ソロー・飯田[1995a] p.171) (“Shams and delusions are esteemed for soundest truths, while reality is fabulous.” [Thoreau [1854] p.62]) 転倒的世界として説明されている。

5 市場依存からの離脱

森で暮らし始めた年、ソローは読書という生活習慣を離れて小屋作りや畑仕事に専念し、時にはそれも放擲して夢想にふけり、「東洋人の言う瞑想とか、無為という言葉の意味を悟った」(ソロー・飯田[1995a] p.202) (“I realize what the Orientals mean by contemplation and the forsaking of works.” [Thoreau [1854], p.73]). その暮らしの中で初めて、彼は「夜のトウモロコシ」(ソロー・飯田[1995a], p.202)のように成長する自己を実感し(“I grew in those seasons like corn in the night” [Thoreau [1854] p.73]), 「自分の暮らしそのものが楽しみ」(ソロー・飯田[1995a] p.204)となり、生きる喜びを味わうことができたのだろう(“my life itself was become my amusement and never ceased to be novel.” [Thoreau [1854] p.73]). その意味で、森に行く直前まで家業の鉛筆製造工場での労働に従事していたソローが森に入り、そこで生活すること自体が「疎外」という問題の自発的解決、つまり、「自分自身を奴隷にしている奴隷監督」(ソロー・飯田[1995a] p.16) (“the slave-driver of yourself” [Thoreau [1854] p.4])であることの「放擲」(“the forsaking of works”)であったのではないだろうか。

市場経済の進歩的側面(例えば生産性の向上)と、そのプロセスにおける非人間的側面(例えば疎外)とは表裏一体のものである。自らの能力を行使して実家の経済状態を改善するために懸命に働くことによって自然観察や読書の時間は削られていく。また、鉛筆工場の製造工程で発生する黒鉛粒子は結核の持病をもつソローの健康状態をさらに悪化させ、彼の短命の一因となったのかもしれない¹⁴⁾。物質的豊かさを得るために工場制度は必要であるが、工場生産の主目的は社会正義や平和の実現ではなく「会社を肥らせること」(ソロー・飯田[1995a] p.52)であり、「人間の成長に必要な」(ソロー・飯田[1995a] p.14)もの(“his growth requires” (Thoreau [1854] p.3)が奪われるという結果をもたらしかねない。だが、他方において、商業には「進取の精神と勇気」

(ソロー・飯田[1995a] p.215) (“enterprise and bravery” [Thoreau [1854] p.77])
 があり、空想的な事業や感傷的な実験からは生まれえない「比類のない成功」
 (ソロー・飯田[1995a] p.217) を収めることができるという魅力もある
 (“Commerce is unexpectedly confident and serene, alert, adventurous, and
 unwearied. It is very natural in its methods withal, far more so than many
 fantastic enterprises and sentimental experiments, and hence its singular
 success.” [Thoreau [1854] p.77-78]). それらが織りなす複層的な社会で営ま
 れる人生の現実に関するアンビバレンツな評価の中で森でのソローの物語は
 進行していったのであろう。

6 ソローにおける自然と人間——結論に代えて

ソローの自然認識は自己 (“the I”, Thoreau [1854] p.1) を起点とする人間と
 の関係性の中で再構築され、「われわれは無数の簡単な検査方法によって、
 自分の人生の価値を測ってみることができよう。たとえば、私の畑のインゲ
 ンマメを熟れさせてくれるその太陽は、同時に地球とよく似た太陽系のさま
 ざまな天体をも照らしている。この事実を忘れずにいたならば、私はいくつ
 かの過ちをまぬがれていたであろう。マメ畑の草取りをしていたとき、私は
 この光に照らされていなかった」(ソロー・飯田[1995a] p.23[傍点は引用者])
 (“We might try our lives by a thousand simple tests; as, for instance, that the
 same sun which ripen my beans illumines at once a system of earths like ours. If
 I had remembered this it would have prevented some mistakes. This was not the
 light in which I hoed them.” [Thoreau [1854] p.6(下線は引用者)]) といった文
 章で端的に表現されている。それに先立ち、自らの人生を「ほとんど手をつ
 けたことのない実験」(ソロー・飯田[1995a] p.20[傍点は引用者]) (“Here is life,
 an experiment to a great extent untried by me” [Thoreau [1854] p.5(下線は引
 用者)]) と表現し、「人生」(“lives” or “life”) が「検査方法」(“tests”) や「実験」

14) この点に関して以下の表現は示唆的である。「マラリアのような毒気にあてられながら、遊覧列
 車のけっこうな客車に乗って天国にゆくよりは、風に吹かれながら牛車に揺られて地上をゆくほ
 うがいい」(ソロー・飯田[1995a] p.70) (“I would rather ride on earth in an ox cart with a free
 circulation, than go to heaven in the fancy car of an excursion train and breathe a *malaria* all
 the way.” [Thoreau [1854] p.23])

("experiment")によって説明されることが暗示されている。同様に、自然の象徴である「太陽」はそれが照射する天体で展開される無数の「検査方法」の総和によって説明され、「われわれ」人間はその「太陽」に照らされることによって生命を維持しうるという関係にある。ソローは太陽と地球(生態系)との関係から自らの人生を再考し、自分と同じ生物種である人間の生活の総体としての文明に思いを巡らせる。「われわれは、太陽が自分たちの耕地や平原や森を分けへだてなく見おろしていることを、とかく忘れがち」(ソロー・飯田[1995a] p.295) ("We are wont to forget that the sun looks on our cultivated fields and on the prairies and forests without distinction." [Thoreau [1854] p.108]) であるが、視点を転換して「太陽から見れば、地球全体が菜園とおなじようにひとしく耕されている」(ソロー・飯田[1995a] p.295) ("In his view the earth is all equally cultivated like a garden." [Thoreau [1854] p.108]) のである。ここまで読み進めたところで、私たちは「雑草との長期戦」(ソロー・飯田[1995a] p.288) ("A long war with weeds" [Thoreau [1854] p.105]) に没頭するあまり自然への感謝を忘れていたソロー自身も実は「『自然』を盗賊の立場から知っているにすぎない」(ソロー・飯田[1995a] p.295) 農民の一人であったことに気付いていたことを知らされるのである。

その点に関する内省をふまえた彼の理念は、心を労することなくその日その日の労働をこなし、畑の産物に対するいっさいの請求権を棄てて、最初の実りだけではなく最後の実りも、心の中で神々に捧げようとするソロー・飯田[1995a] p.296 ("will cease from anxiety …… and finish his labor with every day, relinquishing all claim to the produce of his fields, and sacrificing in his mind not only his first but his last fruits also" [Thoreau [1854] p.108]) 者こそが「まことの農夫」("true husbandman"¹⁵) [Thoreau[1854]p.108]) であるとする「純粹」さ(ソロー・飯田[1995b] p.90) ("purity"¹⁶) [Thoreau [1854] p.142]) あるいは非現実的な理念へと昇華していく。しかし、市場を制御しうる「われわれ」が変わらぬ限り、農業で生計を立てる農夫が「まことの農夫」になることもないだろう。

15) ソローによる "husbandman" と "farmer" の用語法に関して注意すべきであると考える。

16) ソローによる "purity" に関する用語法の一例として以下の文章を掲示しておく。"Who knows what sort of life would result if we had attained to purity?" (Thoreau [1854] p.142)

つまり、ソローの立論に従えば、「農夫」が自然の象徴である太陽の「光と熱の恩恵を、それにふさわしい信頼と雅量をもって受け入れ」(ソロー・飯田 [1995a] p.295) (“a corresponding trust and magnanimity” [Thoreau [1854] p.108]), 自然に対して「盗賊」(“robber”)であることをやめるためには、「われわれ」自身がそのような「生業」^{なりわい}を成立させる社会システム(制度および機構)を支える存在となる以外に取るべき方法はないだろう。

それはきわめて困難な道であるに違いない。しかし、異なる文化や慣習の下でさまざまな信念を抱く70億を超える人々が地球上のあらゆる場所で暮らし、交通・通信手段の高度化によって交流を深めつつある現在、「人生が別のひとの人生にどんな展望を与えるかは、だれにも言いあててはできない」(ソロー・飯田 [1995a] p.23) (“Who shall say what prospect life offers to another?” [Thoreau [1854] p.6]) という関係性が重要度を高めている。今まさしく、過去の歴史からは予測しえない未来が紡ぎ出されているのである。

引用文献

- Thoreau, Henry David [1995], *Walden; or, Life in the Woods*, Dover Publications, Inc.
 内田義彦 [1971] 『社会認識の歩み』岩波書店。
 小熊英二 [2012] 『社会を変えるには』講談社。
 栗山浩一, 庄子康 [2005] 『環境と観光の経済評価』, 勁草書房。
 ソロー, H.D., 飯田実訳 [1995 (a)] 『森の生活(上)』岩波書店。
 ソロー, H.D., 飯田実訳 [1995 (b)] 『森の生活(下)』岩波書店。
 東北文化学園大学 [2014] 『2014 TBGU ハンドブック』東北文化学園大学。
 ハーディング, W., 山口晃訳 [2005] 『ヘンリー・ソローの日々』日本経済評論社。
 ベリー, W., 加藤貞通訳 [2008] 『ウエンデル・ベリーの環境思想——農的生活のすすめ』昭和堂。